

令和元年6月25日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03142

研究課題名（和文）ローカル・リーダーの登場と下層民の台頭からみる現代インド社会の変容

研究課題名（英文）An Investigation of the Changes of Contemporary India through the Rise of People in the Lower Strata and Local Leaders

研究代表者

舟橋 健太（FUNAHASHI, Kenta）

龍谷大学・社会学部・講師

研究者番号：90510488

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクトは、「ローカル・リーダー」の登場と存在、活動に焦点を当てて、「下層民の台頭」の様相を考察の対象とし、現代インド社会の変容を検討した。そこでは、自コミュニティとの深い関係を有する宗教的聖人を掲げての運動ならびに自己主張や、下層の人びとによる起業をはじめとする経済活動、公益訴訟という手法による法的な申し立て活動、そしてそれらの背後にあるナショナルからローカルに至る各リーダーたちの思想が検討・考察された。それらに、現代インド社会の変容のうねりを認め、さらなる研究の展開・深化の必要性を確認するに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究プロジェクトの成果から、現代インド社会の変容の様相を、下層民の台頭ならびにローカル・リーダーの登場と存在、活動から検討することによって、「下からのうねり」として捉え、考察し得たものである。この観点は、とかく階層社会（時に階層固定的社会）と認識されるインド社会について、底流からの変化を検討の俎上に載せたものであり、重要な意義を有すると考えられる。また、そうした「下からのうねり」を、特定の領域に留まらない、多側面から検討し得たことにより、変容がはらむ可能性と困難について、深く考察に至ることができたものである。

研究成果の概要（英文）： This research project aimed to investigate the changes of contemporary Indian society by focusing on the elevation of people from the lower strata and the rise and presence of local leaders among them. In particular, we focused on: 1) the belief in the “Sants,” religious figures who belonged to or had relationships within the lower strata communities, 2) the economic elevation of the people from the lower strata who started their own businesses, 3) Public Interest Litigation (PIL) activities by those in the elite class, such as lawyers and social activists, about the rights and challenges of the people in the lower strata, and 4) the ideology and thoughts of national and local leaders that have influenced the people and the movements.

The changes of the political, economic, and religious situations of those in the lower strata and the changing circumstances in society are interconnected, and this tendency could lead to a fundamental transformation of society as a whole.

研究分野：地域研究、文化人類学

キーワード：インド ローカル・リーダー 社会運動 社会学 文化人類学 思想史 下層民

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究においては、多側面における現代インド社会の変容に関して、特に出自コミュニティに立ち返るリーダーたちに焦点を当てつつ、「下層民の台頭」という観点から分析・考察を行う。それは、社会運動の活性化をはじめとする下層民たちの社会的プレゼンスの高まりは、村落から地区・県、州レベルといった、ローカルな場でのリーダーたちの登場と主導的活動に、その中心的要因を認めることができると考えるからである。各レベルにおけるリーダーの存在の重要性について、またそこから広がる運動の展開可能性について、「ローカル・リーダー」に注目したうえで、研究を推進していく。

2. 研究の目的

従来インド社会の下層に位置づけられてきた人びとは、とりわけ 1990 年代以降、留保制度を中心とする政策的効果や各種の社会運動の成果、人びとの意識変化を背景として、政治・経済的権益の獲得、文化・宗教的自律性の確保を達成しつつある。それは、なぜ、どのようにして起こったのか。その変化は、いかなる歴史的・思想的内容をもち、現代インド社会の基層をどのように変えつつあるのか。本研究では、特に「ローカル・リーダー」の登場と存在、活動に焦点を当てて、村落・県・州など、さまざまなレベルにおける「下層民の台頭」の様相を考察の対象とする。ローカル・リーダーに注目することによって、イニシアティブの生成・発展・挫折の過程を分析し、下層からのうねりによって引き起こされている社会の変化の深度と限界を明らかにする。

3. 研究の方法

研究期間において解明を試みるのは、まずは「ローカル・リーダー」と認識されうる人びとの成り立ちであり、彼/彼女らの意識と活動、影響である。すなわち、リーダーに焦点を当てつつ、周囲のフォロワーとされる人びと（ないしコミュニティ）の社会状況における位置の変化と意識の変革について、考察を及ぼす。リーダーとされる人びとは、どのような来歴や社会的背景をもち、いかなる思想をもってどういった活動に従事しているのか、具体的な複数の事例を取り上げながら、そこに見られる共通性と相違性・地域性について、検討を行っていく。またフォロワーの人びとについて、どういった意識のもとに活動・運動に参画し、そこからいかなる思想的・生活的変容を見せているか、同様に具体的な事例からの考察を行う。調査方法の基軸としては、現地調査に基づく、リーダーの半生史の聞き取りや運動・活動への参与観察、人びとの生活への密着と語りの聞き取りとなる。

これら個別具体的な事例から、下層民の台頭についての帰納的手法による動向の把握を行い、また、リーダーの存在と役割について、多様なコミュニティの事例との比較対照から、そこにみられる類似性と相違性について検討を行う。ここから、ローカルな場、特に下層とされる人びとのなかから、現代インド社会の変容のうねりが生じている様相の分析を試みる。

4. 研究成果

本研究プロジェクトは、「ローカル・リーダー」の登場と存在、活動に焦点を当てて、「下層民の台頭」の様相を考察の対象とし、現代インド社会の変容を検討した。そこでは、以下のような、具体的な事例からの分析・考察がなされた。

まず、思想史的側面から、近現代インドにおける「不可触民」の指導者である B. R. アンベードカル思想における「民主主義」という概念の重要性についての分析が挙げられる。ここでは、アンベードカルのアメリカ留学という経験を契機とした、民主主義に関する洞察とインド社会への導入の試みが検討された。また、同じく近現代インドにおける思想家・社会運動家である R. M. ローヒヤーが考えた「社会主義」に関する考察を挙げることができる。留保制度の原型とも捉えられる思想として、下層民の社会的地位の上昇を企図したローヒヤーの社会主義の現在の有効性について、検討がなされた。

政治的側面からは、タミル・ナドゥ州における非バラモン/ドラヴィダ運動における「不可触民」の立脚点についての分析がなされた。対バラモン主義という大きな旗の下に、広く下層の人びとを結集し得た運動は、利点と難点を合わせ持ちつつ、南インド（特にタミル・ナドゥ州）に特有の展開をみせていると考えられる。また政治的重要性を有するものとして、留保制度をめぐる近年の議論と現況について、特に留保制度の恩恵の偏向と、不可触民青年層の高学歴化と就職難に関して、考察がなされた。

法的な観点からは、公益訴訟に関わる近年の動向についての分析が行われた。そこでは、特に不可触民をはじめとする下層の人びとによって、知的エリートの助力のもと、公益訴訟という手法に基づき、自己ならびに自コミュニティの権利の主張がなされていた。またこうした知的エリートのネットワークが、国民国家の枠を越えて、グローバルに展開している様相も確認することができた。

経済的な観点からは、「インド人間開発調査」の最新データの分析に基づく社会経済資本と社会的動態の相関性に関わる考察がなされた。そこでは、下層の人びとが有する社会経済資本の限定性とそこからくる困難、また、そうしたなかにおける起業をはじめとする近年の経済活動の展開のあり方について、分析が行われた。

宗教的観点からは、自コミュニティとの深い関係を有する宗教的聖人を掲げての運動ならび

に自己主張に関する検討がなされた。具体的には、中世のバクティ運動の詩聖人の崇拜を軸に、平等主義の主張と反差別運動の展開、ならびにコミュニティの凝集と新たなアイデンティティの主張をみることができた。

また特筆すべき成果として、2016年度に開催した国際会議を挙げることができる。2017年2月に、龍谷大学深草キャンパスにおいて、“Understanding Social Exclusion: Dalit Issues in South Asia”と題した国際会議を行った（人間文化研究機構「南アジア地域研究・龍谷大学拠点」共催）。ここでは、広く南アジア社会におけるダリト（元「不可触民」）をめぐる問題について検討するため、インドをはじめ、パキスタン、ネパール、スリランカの状況についての報告と議論がなされた。そこから、国民国家の枠組みを越えた地域社会としての検討の必要性和重要性が認識された。

以上の多側面からの検討・分析を通じて、「下からの」現代インド社会の変容のうねりを強く認識することとなり、さらなる研究の進展・深化の必要性を確認するに至った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計17件)

篠田隆、「インド・グジャラート州の中小零細企業と宗教・カースト」、『大東文化大学紀要(社会科学)』57号、95-113頁、2019年3月。

志賀美和子、「地域主義政党は中央政府への参加を志向するか ドラヴィダ主義政党の場合」、『アジア研究』第62巻第4号、39-54頁、査読有、2016年10月。

舟橋健太、「留保のあとに「不可触民」エリートたちの道」、『部落解放』(「特集 被差別カーストの苦悩と挑戦」)723号、30-39頁、2016年4月。

〔学会発表〕(計66件)

Kenta Funahashi, “Assertion and Negotiation: Religious Practices of Buddhist Dalits in Uttar Pradesh”, International Conference on Governance for the Margins (with special reference to South Asia), Institute for Development and Communication (IDC), Chandigarh, India, February 5, 2018.

Kenta Funahashi, “A Saint of Identity and Connection: Believers of Ravidas in Uttar Pradesh, India”, The Tenth International Convention of Asia Scholars, International Exhibition and Convention Centre, Chiang Mai, Thailand, July 20, 2017.

Kenta Funahashi, “Rethinking the Reservation Policy in Contemporary India: A Local Point of View”, The 3rd ISA Forum of Sociology, University of Vienna, Austria, July 13, 2016.

Kenta Funahashi, “Local Leaders and Dalit Assertion in Contemporary India: A Study of Buddhist Movements in Uttar Pradesh”, 2015 INDAS-UCB International Conference, “Rethinking Religion, Ethics, and Political Economy in India and Sri Lanka: Critical perspectives from Japan”, Institute for South Asia Studies, University of California, Berkeley, USA, February 16, 2016.

Kenta Funahashi, “Buddhist Conversion Movements and Their 'Socialness' in Contemporary India: From the Perspective of 'Engaged Buddhism'”, International Convention of Asia Scholars 9, Adelaide Convention Centre, Adelaide, Australia, July 8, 2015.

〔図書〕(計18件)

Kenta Funahashi, “Rethinking the Reservation System in Contemporary India: A Local Point of View”, Tatsuya Yamamoto and Tomoaki Ueda (eds), *Law and Democracy in Contemporary India: Constitution, Contact Zone, and Performing Rights*, Palgrave Macmillan, pp. 113-130, 2018年12月。

長崎暢子編著、『世界歴史大系 南アジア史4 近代・現代』、山川出版社、632頁、2019年3月。

篠田隆、『インドにおける経営者集団の形成と系譜 グジャラート州の宗教・カーストと経営者』、日本評論社、530頁、2019年2月。

志賀美和子、『近代インドのエリートと民衆 民族主義・共産主義・非バラモン主義の競合』、有志舎、365頁、2018年12月。

舟橋健太、「仏教とともに生きて 現代ウツタル・ブラデーシュ州における仏教運動と仏教実践」、嵩満也(編)『変貌と伝統の現代インド アンベードカルと再定義されるダルマ』、法蔵館、113-134 頁、2018 年 3 月。

Kenta Funahashi, “Excluding themselves? Dalits converting to Buddhism”, Minoru Mio and Abhijit Dasgupta (eds.), *Rethinking Social Exclusion in India*, Oxon: Routledge, pp.88-101, 2017 年 8 月。

鈴木真弥、『現代インドのカーストと不可触民 都市下層民のエスノグラフィー』、慶應義塾大学出版会、288 頁、2015 年 11 月。

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：長崎 暢子

ローマ字氏名：(NAGASAKI, Nobuko)

所属研究機関名：龍谷大学

部局名：人間・科学・宗教総合研究センター

職名：研究フェロー

研究者番号(8桁)：70012979

研究分担者氏名：篠田 隆

ローマ字氏名：(SHINODA, Takashi)

所属研究機関名：大東文化大学

部局名：国際関係学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：20187371

研究分担者氏名：志賀 美和子

ローマ字氏名：(SHIGA, Miwako)

所属研究機関名：専修大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：80401157

研究分担者氏名：石坂 晋哉

ローマ字氏名：(ISHIZAKA, Shinya)

所属研究機関名：愛媛大学

部局名：法文学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：20525068

研究分担者氏名：鈴木 真弥

ローマ字氏名：(SUZUKI, Maya)

所属研究機関名：東京外国語大学

部局名：南アジア研究センター

職名：研究員

研究者番号(8桁)：30725180

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。